

両親の養育態度，生活体験が小学生の社会的スキル， 生活充実感に及ぼす影響

青木多寿子・竹嶋飛鳥¹・戸田真弓²・谷口弘一³

(2007年10月4日受理)

The Influence of Parenting Attitudes and Everyday Activities over Social Skills
and the Sense of Well-being in Elementary School Students.

Tazuko Aoki, Asuka Takeshima, Mayumi Toda and Kouichi Taniguchi

Abstract. This study examines the effects of parenting attitudes and everyday activities on the sense of well-being and social skills of elementary students. One hundred eighty two 5th grade and seventy one of 6th grade students participated in this research. The parental attitudes examined were; over protectiveness and over negative parenting. In the elementary students we looked at the following social skills; participation in group, maintaining relationships and improving relationships. We analyzed these relations while paying attention to the combination of sex differences. The results were as follows; in elementary school students only in girls, did we find the influence of both parenting attitudes, however in boys, we did not find the influence of parenting attitudes. Aoki et al. (preparing) showed the opposite gender combination effects more in middle school students. That means parenting attitudes were more effective in middle school students. However, everyday activities in boys have a positive effect for improving relationship skills and the sense of well-being and in girls for maintaining relationships and improving relationships. We found everyday activities might be more important than parenting attitudes to get social skills and the sense of well-being in elementary school students. We need to examine in more detail the relationship of everyday activities, social skills and the sense of well-being in students in the point of resilience.

Key words: parenting attitudes, social skills, the sense of well-being, everyday activities, elementary students.

キーワード：養育態度，社会的スキル，生活充実感，生活体験，小学生

1. はじめに

子ども同士の結びつきの弱さから生じるいじめや学級崩壊などの問題，対人関係のつまづきによるストレス，不登校など心の問題も数多く指摘されている。こ

のような問題が生じる理由の一つに子どもの社会的スキルの乏しさや欠如，あるいは不適切さが挙げられる (Conger & Keane, 1981; 坂野, 1991; 佐藤・佐藤・高山, 1988)。社会的スキルとは，良好な人間関係を形成し，維持していくための人間関係に関する知識と具体的な技術やコツの総称である (相川, 2000)。そして社会的スキルは，性格のような先天的なものではなく，生後の経験を元に後天的に習得される。つまり，社会的スキルは学習を通じて獲得される行動である

¹ 倉敷市立茶屋町小学校

² 倉敷市立新本小学校

³ 同志社大学文学部

(鈴木・庄司, 1990)。

社会的スキルを学習する場面には、家庭や学校、地域などさまざまな場面が考えられるが、中でも家庭は重要な場面といえる。なぜなら子どもは家族という第一次集団の中で親の行動を観察・モデリングし、親からのしつけを通して、基礎的な社会的スキルを獲得すると考えられるからである。そして先行研究からは親の愛情的な養育態度が子どもの社会的スキルを高め(Argyle & Henderson, 1985)、過保護で拒否的な養育態度が社会的スキルを低下させる(Argyle et al., 1985; Scott, Scott, & McCabe, 1991)ことが報告されている。

戸ヶ崎・坂野(1997)は、家庭と学校の2つの場面における社会的スキルを取り上げ、小学生を対象に、母親の養育態度、子どもの社会的スキル、クラス内地位の関連について検討を行っている。彼女らは家庭における社会的スキルが、関係維持行動、関係向上行動、主張行動で構成されていること、学校における社会的スキルが関係維持行動、関係向上行動、関係参加行動で構成されていることを明らかにしている。また、母親の積極的拒否傾向が強いほど、家庭における社会的スキル(特に、関係維持行動、関係向上行動)の獲得が少ないこと、そして家庭における社会的スキルが学校における社会的スキル(特に、関係維持行動、関係参加行動)に影響を与え、学校における社会的スキル(特に、関係向上行動、関係参加行動)がクラス内地位を高めるように機能していることを明らかにしている。また、谷口・田中(2004)は、小学生と高校生を対象にして、母親の養育態度(愛情的・拒否的傾向)、子どもの社会的スキル(共感的・主張的スキル)、学校適応感との関連を検討し、以下のような結果を見だしている。小学生では母親の養育態度が学校適応感に対して直接的な影響を与えていると同時に、社会的スキルを仲介した間接的な影響も与えていた。一方、高校生では、母親の養育態度が学校適応感に対して社会的スキルを仲介した間接的な影響のみを持っていた。こうした結果から、彼らは年齢の増加とともに、母親の養育態度よりも社会的スキルの方が学校適応感に対して、より重要な役割を果たすようになることを指摘している。

他方、青木・谷口・竹嶋・戸田(準備中)は、性別意識が強くなり、親からの自立心が芽生える中学生を対象とした研究を行っている。彼女たちは、中学生では特に同性の親、異性の親との関係は複雑になると考え、母親だけでなく、父親を加えて養育態度が子どもの社会的スキルや適応行動にどのような影響を与えているかを検討した。その結果、男子では母親の過保護が関係向上行動を高め、母親の拒否が関係維持

行動を低めるのに対して、女子では父親の拒否が関係維持行動を低めるなど、社会的スキルの獲得には同性よりも異性の親の養育態度の影響力が大きいことがわかった。しかし、この結果は中学生だけを検討したものであり、小学生でも異性の親の影響が大きいのかどうかは明らかでない。

以上のような先行研究を踏まえて、本研究では、青木ら(準備中)とほぼ同じ手続きで小学生を対象に、父親および母親の養育態度が子どもの社会的スキルや適応行動に対してどのような影響を与えているかを検討した。その際、親子間の性別の組み合わせも考慮に入れながら詳細に検討を行う。従って取り上げた養育態度は、青木ら(準備中)同様、過保護および拒否的養育態度の2つである。子どもの社会的スキルについては、戸ヶ崎・坂野(1997)が学校での社会的スキルとして見だした関係維持行動、関係向上行動、関係参加行動の3つのスキル行動となる。

他方で、同じ環境で養育されても健全に成長する子どももいる一方で、不適応を起こす子どももいるだろう。同じ養育態度で養育されても生じるこの子どもの側の適応力を考えるとき、レジリエンス(Resilience)が関わっている可能性が考えられる。“レジリエンス”とは“かなりの悪条件の元でも肯定的な適応を可能にしていく動的な過程”のことを言う。レジリエンスは、①地域社会のレベル、②家族のレベル、③子ども自身のレベルという3つの水準で捉えられ、これらが互いに作用しあい子どもの発達と適応に影響していく(Luthar, Cicchetti, & Becke, 2000)。このことから、家族のレベルとしての親の養育態度は子どもにマイナスの影響を与えてしまうような場合であっても、地域社会のレベルにおける生活体験がそれを補うものとして作用すれば、子どもの肯定的な適応を可能にしていく場合もあると考えられる。そして、地域レベルでの水準において子どもの適応力を増すプロセスを解明できれば、学校教育の中、地域社会の中の活動を通じて、例えば家庭環境としては恵まれない子どもがいても、周囲の力で子どもを健全に導くプロセスを明らかにすることができるに違いない。そこで本研究は、家庭の状況に関係なく周囲で支援できるものとして生活体験を取り上げた。

他方、近年、人のネガティブな側面だけでなくポジティブな特性を解明しようとする心理学が目目されるようになってきた(Selgman, 2000; 島井, 2006)。この観点を親の養育態度の研究に取り入れるのなら、親のどのような養育態度が、子どものポジティブな特性に関わるのか、という問題設定を立てることができるだろう。貧しい家庭環境、不適切な養育態度の中で育

つ子ども達の家庭環境を取り替えることができないのなら、子ども達のレジリエンスを高めるという観点から、子ども達のポジティブな側面を伸ばす要因は何かという問題設定の研究もできるに違いない。そしてその方が子どもの成長、発達に関し実りある情報を提供できるのではなからうか。では、ポジティブな特性を育んだとして、どのような状態になれば健やかに成長したと考えるのか。本研究はこの点に関しては、毎日、充実感を感じて暮らせればよいと考え、生活充実感を指標とした。そこで本研究は、親の養育態度と社会的スキル、そして生活充実感 (sense of well-being) の関係を調べることにした。

以上のことをまとめると、本研究では小学生を対象に、Fig.1に示す生活充実感をゴールにするモデルを検討することになる。その際、青木ら (準備中) の研究と同様に、以下の検討を行う。それは、①父親と母親の両方の養育態度を測定し、親子間の性別の組み合わせも考慮に入れながら、検討を行う、②戸ヶ崎・坂野 (1997)、谷口・田中 (2004) の研究を参考にして、父親および母親の養育態度が、社会的スキルを仲介して子どもの適応行動にどのような影響を与えているかも併せて検討を行う、さらに青木ら (準備中) に加えて、③レジリエンスとして生活体験を取り上げ、生活体験が社会的スキルを仲介して、子どもの生活充実感に影響を与えると考え、その影響過程もあわせて検討する。

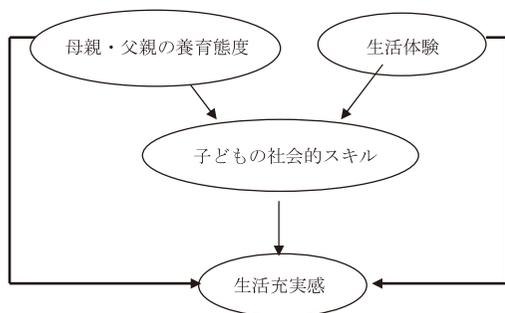


Figure 1 本研究における仮説モデル

方法

調査参加者および手続き 参加者は岡山県内の公立小学校5年生182名 (男子88名・女子94名)、6年生71名 (男子36名・女子35名)。調査は無記名選択式で実施した。調査実施時期は2004年9月～12月。分析の対象としたアンケートの内容は、青木ら (準備中) と同様である。ただし、一部の学校側の要請に応じて、青木ら

(準備中) に加えて、ダミーとして肯定的な項目や先生について回答する項目も加えた。さらに、配布方法も青木ら (準備中) と異なっている。中学生を対象とした調査では、学校側の判断で、参加者には両親について回答してもらうことになったが、今回の小学校の調査では学校からの要請で、父親または母親のいずれかに回答してもらうことになった。したがってアンケートは、一人親家庭の子どもを考慮して、担任が適度に割り振って配布した。その結果、母親回答125名、父親回答128名となった。

調査内容

- 1) 親の養育態度の評定：TK 式診断的新親子関係検査 (小・中学校用) から母親もしくは父親の養育態度について問う「拒否的態度非難型」「保護的態度干渉型」を診断する16項目 (品川・河合・森山・品川, 1972)。
- 2) 社会的スキル尺度：戸ヶ崎・坂野 (1997) の学校における社会的スキル尺度のうち、①関係維持行動、②関係向上行動、③関係参加行動から各5項目、家庭における社会的スキル尺度の表現を適切に修正した④主張行動から5項目、合計20項目。
- 3) 生活体験の評定：齋藤・寺岡 (2000) の生活体験尺度からペットの飼育経験、ボランティア活動、自然体験の3項目。
- 4) 生活充実感の評定：平石 (1990a, b) の自己肯定意識尺度から充実感より8項目および中山・藤原 (2003) の生活満足度4項目のうち、内容の重複するものを除いた11項目。
- 5) ダミー項目：各学校の要求に応じた、親や教師についての肯定的な側面に回答する項目7項目。

以上の合計項目で構成し、これらについて「ぴったりあてはまる (4点)」「だいたいあてはまる (3点)」「あまりあてはまらない (2点)」「ぜんぜんあてはまらない (1点)」の4段階評定で求めた。

結果

(1) 因子構造

父親か母親のいずれか一人について回答してもらったため、父親回答者と母親回答者が異なるグループとなった。このため、青木ら (準備中) とは異なり、父母別々に因子分析を行った。

養育態度は既製のテストであるので項目を全て採用した結果、 α 係数はそれぞれ拒否的 .72、過保護的 .69であった (Table 1)。

生活充実感、生活体験についてはそれぞれ1因子に固定して主因子法で因子分析を行った。生活充実感

因子負荷量絶対値が.40より大きい項目を採用したところ、 α 係数は.80であった（Table 2）。生活体験は項目数が3項目しかないため因子負荷量絶対値が.35より大きい項目を採用したところ、 α 係数は.58であった（Table 3）。

社会的スキルは、戸ヶ崎・坂野（1997）、青木ら（準備中）を参考に学校場面における社会的スキルは3因子だと仮定して、主因子法プロマックス回転を行った。その上で因子負荷量絶対値が.40より大きい項目を採用した（Table 4）。

そこで Fig.1 に示した仮説モデルを検証するために、①外生変数を父親（または母親）の養育態度、内生変数を社会的スキル（3因子）、および生活充実感とした重回帰分析に基づくパス解析、②外生変数を生活体験、内生変数を社会的スキル（3因子）、および生活充実感とした重回帰分析に基づくパス解析を父親、母親ごとに男女別に行った。得られた標準回帰係数（ β ）をパス係数とし、有意であった部分を矢印で描いたものが Fig.2～5 である。

Table 1 両親の養育態度（拒否・過保護）の項目

| 拒否（父： $\alpha = .71$ 母： $\alpha = .73$ ） | |
|---|--|
| 1 | わたしのお父さんは、わたしによく小言を言います。 |
| 3 | わたしのお父さんは、私の成績物や作品を悪く言ったり、笑ったりします。 |
| 5 | 何かやろうとしても「あれはだめ」「これはいけない」とお父さんに止められます。 |
| 7 | 私のお父さんは、わたしをどなることがあります。 |
| 9 | お父さんはわたしに向かって、わたしの欠点(悪いところ)を悪く言います。 |
| 11 | わたしのお父さんは、きげんの悪いとき、わたしにあたりちらします。 |
| 13 | お父さんは、罰として買ってくれなかったり、やってくれなかったりすることがあります。 |
| 15 | お父さんは「あなたは、どうせだめなんだから」と言いながら、成績が悪いとしかります。 |
| 過保護（父： $\alpha = .69$ 母： $\alpha = .70$ ） | |
| 2 | 自分でできるのに、お父さんがわたしの身のまわりのことを手伝ってくれます。 |
| 4 | わたしのお父さんは、食事のとき「たくさんおあがり」「すききらいはいけない」などとやかましく言います。 |
| 6 | 私の宿題や作ったものには、お父さんが必ず目をとおしたり、手伝ったりします。 |
| 8 | わたしのお父さんは、学校のことを細かくわたしに聞きます。 |
| 10 | わたしのお父さんは、わたしのことをいろいろと世話をやきます。 |
| 12 | わたしが自分でしようと思っているのに、お父さんがしなさいと言います。 |
| 14 | わたしのことで、お父さんが一番熱心になるのは勉強のことです。 |
| 16 | わたしのお父さんは、わたしが悪い友だちと悪い遊びをしないようにとうるさく言います。 |

注. 母の場合は「お父さん」が「お母さん」に代わります。

Table 2 生活充実感の因子分析結果

| 質問項目 | I | |
|---|-------|-------|
| | 父 | 母 |
| I 生活充実感（父： $\alpha = .80$ / 母： $\alpha = .87$ ） | | |
| 24 | .73 | .79 |
| 28 | .71 | .65 |
| 27 | .61 | .58 |
| 26 | .56 | .53 |
| 31 | .54 | .80 |
| 30 | .49 | .61 |
| 32 | .47 | .59 |
| 25 | .47 | .44 |
| 33 | -.44 | -.65 |
| 34 | -.41 | -.52 |
| 29 | .37 | .55 |
| 寄与率 (%) | 29.03 | 38.15 |
| 累積寄与率 (%) | 29.03 | 38.15 |

注. (※) は逆転項目。■で囲んだ、絶対値が0.40以上の項目を採用する。

Table 3 生活体験の因子分析結果

| 質問項目 | I | |
|--|-------|-------|
| | 父 | 母 |
| I 生活体験（父： $\alpha = .58$ / 母： $\alpha = .52$ ） | | |
| 22 | .75 | .57 |
| 21 | .50 | .63 |
| 23 | .47 | .39 |
| 寄与率 (%) | 34.24 | 29.10 |
| 累積寄与率 (%) | 34.24 | 29.10 |

注. (※) は逆転項目。■で囲んだ、絶対値が0.40以上の項目を採用する。

1) 養育態度と社会的スキル、生活充実感の関係

Fig.2～5の結果の図より、親の養育態度が社会的スキルに影響している部分は、女子の父親回答で過保護が関係向上行動にプラスに、母親回答で拒否が関係維持行動にマイナスに影響している部分だけである。つまり、親の養育態度の影響では男女差がみられ、男子は親の養育態度の影響を受けていないが、女子が父親と母親の養育態度の影響を受けていることがわかる。この結果は、小学生では女子の方が他者の影響を受けやすいことを示している。しかしこれらの影響は、生活充実感にはつながっていない。つまり、親の養育態度は、女子の社会的スキルの獲得には関係しているが、小学生では男女とも生活充実感というポジティブな特性には結びついていないことになる。

他方、生活充実感につながっているのは、親の養育態度よりはむしろ、社会的スキルの中の、関係参加行

動、関係向上行動である。つまり、友達の輪の中に入ろうとするスキル（関係参加行動）、友達を助けたり励ましたりする関係向上行動のスキルが生活充実感に関わっていることになる。

以上の結果から小学生の男子は社会的スキルの獲得に親の養育態度の影響を受けにくいこと、女子が両親の養育態度の影響を受けること、しかしこれらは生活充実感には関係なく、小学生の生活充実感に関わっているものは、関係参加行動、関係向上行動などの社会的スキルであることが伺える。

2) 生活体験と生活充実感の関係

男子の場合、父親回答の児童では、生活体験は関係向上行動につながり、関係向上行動は生活充実感につながっている。母親回答の児童では、生活体験は社会的スキルには関わっていないものの、生活充実感には

Table 4 社会的スキルの因子分析結果

| 質問項目 | I | | II | | III | |
|--|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 父 | 母 | 父 | 母 | 父 | 母 |
| I 関係参加行動 (父: $\alpha = .74$ /母: $\alpha = .78$) | | | | | | |
| 9 友だちにあまり話しかけられない。(※) | .74 | .60 | | .19 | -.14 | |
| 15 休み時間に友だちとあまりおしゃべりをしない。(※) | .69 | .76 | -.15 | | | |
| 3 友だちとはなれて一人で遊ぶ。(※) | .68 | .67 | | .16 | | .12 |
| 11 友だちの遊びをじっと見ていることが多い。(※) | .54 | .69 | | -.25 | | |
| 7 遊んでいる友だちの中に入ろうとしても、なかなか入れない。(※) | .42 | .62 | .31 | | .27 | |
| II 関係維持行動 (父: $\alpha = .64$ /母: $\alpha = .65$) | | | | | | |
| 5 なんでも友だちのせいにする。(※) | .14 | | .77 | .38 | .14 | |
| 13 友だちの欠点や失敗をよく言う。(※) | -.18 | | .56 | .63 | | .14 |
| 1 よく友だちのじゃまをする。(※) | | | .55 | .50 | | |
| 17 まちがいがあっても素直にあやまらない。(※) | | .20 | .46 | .48 | | -.13 |
| 18 友だちのたのみをよく聞いてあげる。 | -.16 | | -.43 | -.30 | .26 | .35 |
| 9 友だちに乱暴な話し方をする(※) | | -.12 | .33 | .73 | -.22 | .12 |
| III 関係向上行動 (父: $\alpha = 0.68$ /母: $\alpha = 0.63$) | | | | | | |
| 10 相手の気持ちを考えて話す。 | | .16 | -.15 | | .70 | .54 |
| 6 こまっている友だちを助けてあげる。 | | | -.28 | -.15 | .63 | .69 |
| 2 友だちが失敗したらはげましてあげる。 | | | | .10 | .48 | .66 |
| 14 友だちの意見に反対するときには、きちんとその理由を言う。 | | | | .20 | .40 | .47 |
| 寄与率 (%) | 20.35 | 20.47 | 11.79 | 12.18 | 5.66 | 5.39 |
| 累積寄与率 (%) | 20.35 | 20.47 | 32.14 | 32.65 | 37.80 | 38.04 |

注。(※)は逆転項目。■で囲んだ、絶対値が0.40以上の項目を採用する。

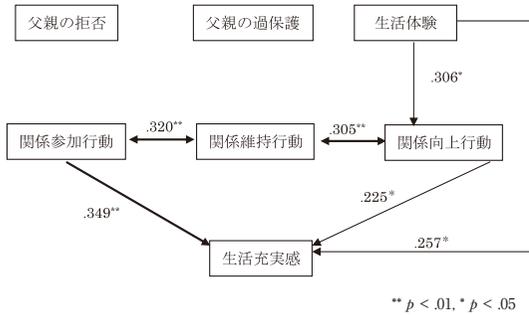


Figure 2 男子における父親の養育態度，社会的スキル，生活充実感の関連

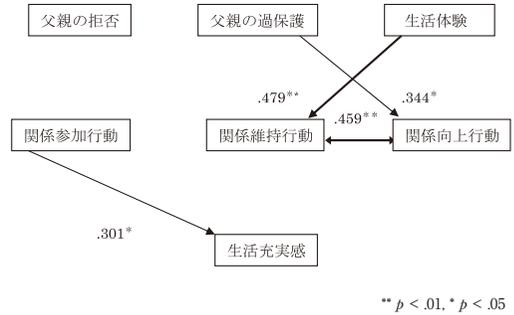


Figure 3 女子における父親の養育態度，社会的スキル，生活充実感の関連

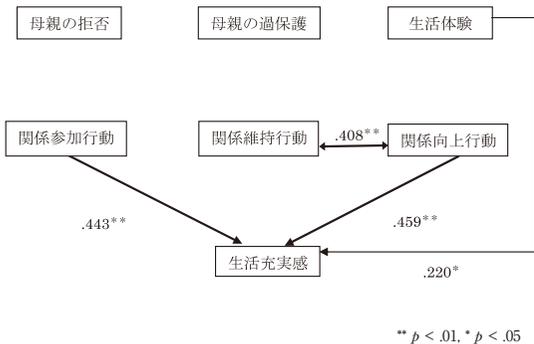


Figure 4 男子における母親の養育態度，社会的スキル，生活充実感の関連

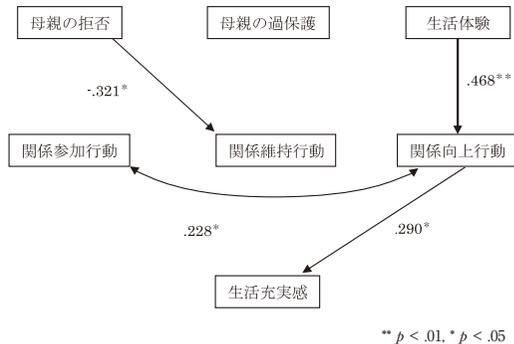


Figure 5 女子における母親の養育態度，社会的スキル，生活充実感の関連

関わっている。これらのことから、生活体験は、男子の社会的スキルの獲得、生活充実感に関わっている可能性が考えられる。

他方女子では、生活体験は生活充実感に影響を与えていない。しかし社会的スキルには影響を与えており、父親回答の児童では関係維持行動、母親回答の児童では関係向上行動に影響を与えている。さらに、母親回答の児童の場合、社会的スキルにつながるパスは生活充実感につながっている。これら結果から、女子では生活体験は、直接生活充実感に関わるものではないものの、社会的スキルを育み、そのスキルが生活充実感に結びついている。

以上の結果から、小学生では親の養育態度よりも、むしろ生活体験がポジティブな特性や社会的スキルの獲得に結びついている可能性が示唆された。

考察

青木ら（準備中）の中学生の研究では、重回帰分析の結果、異性の親の養育態度が社会的スキルに影響していた。一方で本研究の結果、小学生は中学生ほど社会的スキルが親の養育態度の影響を受けないことがわかった。唯一の影響が女子での影響で、母親回答の児童で拒否が関係維持行動にマイナスに、父親回答の児童で過保護が関係向上行動にプラスに影響しているだけであった。しかし青木ら（準備中）の研究と比較すると、小学生は親の養育態度の影響が小さいことがわかる。ではなぜ、小学生では親の養育態度の親の影響が小さいのであろうか。これについては次のように解釈できる。

一つは、小学生は自己中心性の強さである。長尾（1991）は、思春期に入ると脱中心化が生じるため、悩みが生まれるとしている。つまり、小学生は自己中

心性の高さゆえ、自分の親や家族を客観的に評価できず、かえって悩みから救われている側面があると考えられよう。この自己中心性の高さのため、親の養育態度の善し悪しに気づきにくいのではなからうか。

もう一つの可能性は小学校高学年はギャング・エイジ世代であることである。この時期は人生で最も仲間遊びが盛んになる時期と言われ、同性、同年齢の子どもと自然とグループを作って遊べる時期である。このため、仲間遊びが楽しくて、親の養育態度の不適切さには気づかずに、難なく過ごしていける時期なのかもしれない。逆に中学生は、ギャング・エイジ的な仲間遊びが減ること、第二次性徴の明確化、学習環境・生活環境などの変化、様々な競争が始まり、友達や親に対する意識も複雑化し、周囲に敏感な時期となるのではなからうか。小学生より中学生の方が親の直接影響を受けやすいというこの結果は、心理的離乳は親の養育態度によって難しくなる可能性があることを示唆しているように思える。

生活体験に関しては、次のことがわかった。女子では生活体験は生活充実感に直接影響はしていなかった。しかし、男子では生活体験が生活充実感に直接影響を与えている。つまり小学生の男子では、ペットの世話や植物の水やり、地域の清掃などのボランティア活動、自然の中でのキャンプといった活動は、充実感を高める活動であることが窺える。また、同性の親について回答したグループでは、生活体験が社会的スキル（関係向上行動）を高め、友達を助ける、励ますといった楽しい友人関係をより良好にするスキルの高さが生活充実感につながっていることもわかる。これらのことから、生活体験は男子の生活充実感を高め、男女の小学生の社会的スキルを高める働きがあると考えられる。

レジリエンスという側面から本研究の生活体験の結果を考えた場合、本研究の結果は、小学生では親の養育態度よりも生活体験が豊かであれば生活を有効にする社会的スキルを身に付けることができ、生活は充実したものになる可能性を示しているように思われる。母親の養育態度と学校適応感との関係を検討した谷口・田中(2004)では、小学生よりも高校生で、母親の養育態度よりも社会的スキルの方が学校適応感により重要な働きをすることを示している。子どもの生活体験を豊かにすることは、教師をはじめとする周囲の大人の力で作ってやれる環境である。生活体験の充実をはかり、子どもの社会的スキルを高めてやることは、小学生だけでなく高校生にとっても、子どもの生活充実感や学校適応感を高め、レジリエンスを高める1つの可能性を持っているのではなからうか。

しかし本研究で取り上げた生活体験については、学校において体験可能な生活体験として、ペットの世話や植物の水やり、地域の清掃などのボランティア活動、自然の中でのキャンプなどについて回答してもらったにすぎない。このため、質問項目が少なく、因子分析において α 係数があまり高い値を示していない。よって、今後様々な生活体験の中から、項目数を増やして、より信頼性の高い因子構造を検討する必要があると考えられる。

最後に、子どもに対して親のことを尋ねる本研究のアンケートは、一人親家庭の存在を考えると大変デリケートな部分を含んでいる。このためアンケートの内容や実施方法に関しては、全面的に学校の要請に応じるという方針をとった。こうして小学生には母親もしくは父親の養育態度を回答してもらうことになった。これらの配慮の結果、小学生を対象とした本研究と中学生を対象とした青木ら(準備中)では、類似の調査であるにもかかわらず、因子分析において共通因子を抽出することができなかった。また、小学生内においても、母親か父親のどちらかを回答してもらっているために、父親と母親の違いを直接比較ができず、母親の養育態度を回答した児童と父親の養育態度を回答した児童について分けて分析することになった。また、小学校では小5と小6の人数に偏りが出てしまったことも気になる点であると言える。今後は、上記の問題点を考慮しながら、親の養育態度の研究を進めるとともに、子どものレジリエンス、ポジティブな特性の育成の関係についてさらに研究を進める必要があるだろう。

【文献】

- 相川 充 (2000) セレクション社会心理学 20 人づきあいの時術—社会的スキルの心理学—サイエンス社
 アーガイル M.・ヘンダーソン M. 吉森 譲 (編訳)
 (1992) 人間関係のルールとスキル 北大路書房
 青木多寿子・谷口弘一・竹嶋飛鳥・戸田真弓(準備中)
 両親の養育態度が中学生の社会的スキルおよび生活充実感に及ぼす影響
 Argyle, M., & Henderson, M. (1985) The anatomy of relationships and the rules and skills to manage them successfully. Harmondsworth: Penguin books.
 Conger, J.C., & Keane, S.P. (1981) Social skills intervention in the treatment of isolated or withdrawn children. *Psychological Bulletin*, 90, 478-495.
 平石賢治 (1990a) 青年期における自己意識の構造—自己確率感と自己拡散感からみた心理学的健康—

- 教育心理学研究, 38, 320-329.
- 平石賢治 (1990b) 青年期における自己意識の発達に関する研究 (I) - 自己肯定性次元と自己安定性次元の検討 - 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 37, 217-234.
- Luthar, S. S., Cicchetti, D., & Becker, B. (2000) The Construct of Resilience: A Critical Evaluation and Guidelines for Future Work. *Child Development*, 71, 543-562.
- 長尾 博 (1991) ケース青年心理学 有斐閣ブックス (653)
- 中山真美・藤原綾子 (2003) 児童の生活満足度と主体性・協調性との関連 - 集団遊びの志向性との関連と性差 - 岡山大学教育学部卒業論文 (未公開)
- 坂野雄二 (1991) Social Skills の概念規定と SST の発展に関する展望 集団精神療法, 83-89.
- 齋藤奈緒美・寺岡佐夜子 (2000) 向社会的行動に関する研究 岡山大学教育学部2000年度卒業論文
- 佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 (1988) 拒否される子どもの社会的スキル 行動療法研究, 13, 126-133.
- Scott, W. A., Scott, R., & McCabe, M. (1991) Family relationships and children's personality: A cross-cultural cross-source comparison. *British Journal of Social Psychology*, 30, 1-20.
- Seligman, M. E. P. 1998a Building human strength: Psychology's forgotten mission. *APA Monitor*, 29, January, 2.
- 島井哲志 (2006) ポジティブ心理学の背景と歴史的経緯 島井哲志編 ポジティブ心理学; 21世紀の心理学の可能性 ナカニシヤ出版 3-21.
- 品川不二郎・河井芳文・森上史朗・品川 孝 (1972) TK 式診断的新親子関係検査手引 田研出版
- 鈴木聡志・庄司 一 (1990) 子どもの社会的スキルの内容について 教育相談研究, 28, 24-32.
- 谷口弘一・田中宏二 (2004) 親の養育態度が児童・生徒の社会的スキル, 学校適応感, および絶望感に及ぼす効果 岡山大学教育学部研究集録, 127, 21-27.
- Taniguchi, H., & Ura, M. (2001) The links between parents' child rearing attitudes, children's social skills, and support giving and support receiving in friendships among children. *Japanese Journal of Social Psychology*, 17, 12-21.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1997) 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応に及ぼす影響 - 積極的拒否型の養育態度の観点から - 教育心理学研究, 45, 173-182.